

第 6 話 ; 弱音ハクの憂鬱

「 はああああつ。」

世にも切なげなため息をつきながら、
移調 珀世(はくよ)は、悩んでいた。
ヘタウマな曲が、なぜか、世間の底辺の共感を呼ぶと話題になり、
弱音ハクの芸名で、そこそこ稼いでる彼女にも、
悩みは、そりゃああるが、ここのところの、スランプは
底なしのブラックホール状態だった。
悩みを突き抜けて、ウツの領域に達している。
旦那の徹は、USA のアポロ・シアターで、
新人歌手のプロモートに忙殺され、電話にも出してくれない。
息子は、息子で、昨日の夜、街に機材一式持っていったまま、
戻ってこない。愛飲のスピルタスを飲みながら、管を巻いていると、
玄関のチャイムが鳴った。

「 ただいまあ。」

と、聞き慣れた少年の声がしたので、玄関に迎えにいくが、
続いた声に足をとめた。

「 ここが、マスターのお家ですか？ 」

「 にゃあ♪ 」

「 唱太？！ どうしたの？ その娘？ 」

珀世ママは、ストリートミュージックから帰ってきた息子の
彼女らしい少女を見て理由を尋ねてみる。
唱太は、いや、そのと、慌てている様子。

「 マスターのお母様ですか？ 」

「 マスター？ 」

彼女なら彼氏に対して、そんな呼び方はしない、
ジト目になって、珀世ママはミクを凝視した。
唱太は、なにか、冷や汗などかいている。
ミクは、興味深げに珀世ママを見ると、ぺこりとおじぎをした。
意表をつかれて、慌てて、笑いかえしてしまう。

「 よろしく、お願いします！お母様！ 」

「 ええ、こ、こちらこそ、よろしくね…。 」

挨拶をかえしながら、ちょっとと、唱太の耳をひっぱりながら、
彼に詰問する。耳をつねられて、いたたたたつといいながら、
唱太は奥まで引っ張られて、母親に声をひそめて尋ねられる。
完全に疑いの目だ…。

「 彼女、何者なの？ 」

唱ちゃんのいいヒトって感じでもなさそうだし… 」

困った、本当のことを言うとアレだと思われるだろう。
どうしたものか…。

「 ええと、その…。 」

「 どうしたの？もしかして、どっかから、ラチって来たとか… 」

「 んなわきゃないだろ！ 空から落ちてきたんだって！ 」

はっとして、母をみると、
せつない生き物を哀れむかのような目で唱太をみつめ、
彼の額に手の甲をあてながら、ぽつりとつぶやいた。

「 ツマンネ冗談言ってるし… 」

「 はあ？ツマンネのは、
ダメダメ歌手のお袋のほうだろう！ 」

「私のはいいのよ！あれは、ほめ言葉なの！」

涙目で、珀世はどなると、
持っていた酒瓶で、唱太の頭をぶんなぐった。
いてえなというと、唱太は珀世をどつきまくる。
こうして、どたんばたんと、親子ゲンカがはじまった。
もう、小一時間も、不毛な言い争いは続いている、
ミクは、おろおろと状況を見守り、名案を思いついた。

《つづく》